幼年童話

踏切ごッこ

武田雪夫

1

さあ、これから、「踏切ごッこ」といふ、面白いお話をして上げませうね。

ヒデヲ君が、幼稚園から、

「唯今！」ッて、元氣よく歸つて來ますと、お友だちが、大ぜい、遊びに來ました。

――一ばん先に、まづ、キミコさんが來ました。タケシ君も來ました。それから、ヨシコさんと、シゲヲ君が、一しょに來ました。あとから、カズコさんも來ました。

ヒデヲ君のお母さまが、出ていらしゃいました。そして、

「まあ、まあ、大ぜいのお友だちですこと。みなさん、仲よく、お遊びなさいね。今日は、こんなに、よいお天氣で、あたたかですから、お庭でお遊びなさいな」。と、おつしゃいました。

ヒデヲ君は、

「はい」。と、お返じをして、一寸考へてゐましたが、

「あゝ、さうだ、さうだ。ぢゃあ、今から、みんなで、汽車ごッこをして遊ばうよ」。といひました。

「いゝなあ」。

「うれしい、うれしい」。

「面白いわね」。

「えゝ、わたし、大すきよ」。

みんなは、よろこんで、わいわい大さわぎをしました。

2

ヒデヲ君のお家の庭は、廣い廣い庭です。――芝生もあります。木も、たくさん植はつてゐます。お池もあります。それから、小さな、富士山のやうな形のお山もあります。

そら、お山のかげから、汽車が出て來ました。ヒデヲ君が、先頭です。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

まあ、大へんな元氣です。あゝ、ヒデヲ君が、機關車なのです。

キミコさんも、タケシ君も、ヨシ子さんも、カズコさんも、みんな乘つて居ます。シゲヲ君は、一ばん後に乘つてゐます。

シゲヲ君が、大きな聲で、

「次は、東京、東京でございます」。といひました。ああ、シゲヲ君は、車掌さんになつてゐるのですね。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

汽車は、山の後から、お池のそばを通りました。それから、太い木のこころを曲るこ、芝生の中へ入つて來ました。

シュシュ、ポポ、シュシュ、ポポ、シュ、ポポ、シュ、ポポ……。

おやおや、汽車は、急に早く走り出しました。さうするこ、キミコさんも、タケシ君も、乘つてゐるお客さんは、みんな、ごんごん、一しょに、早くかけ出さなければなりません。

だつて、この汽車は、お紐の汽車なのですもの。一本の長いお紐を結んで、その中へ、みんなで入つてゐるのです。

3

そこへ、誰か來ました。

「ヒデヲくーん」。

さう言つて、入つて來たのは、ヒサシ君でした。

みんなが、面白さうに、汽車ごッこをしてゐます。ヒサシ君は、すぐに、仲間に入りたくなりました。ヒサシ君は、汽車を追ひかけて行つて

「ねえ、ぼくも入れてよ。――のせて、くれたまへ」。こ、いひました。

汽車は、すぐに止りました。

けれども、汽車は、一ぱいです、もう、一人も乗られません。一人でも乗つたら、それこそ、みんな足を踏んでしまつて、こても、かけては歩けないでせう。

すると、その時、シゲヲ君が、

「そんなら、君、驛長さんになりたまへな。そこのお縁側のところが、停車場だから、そこに、立つてゐればよいよ」。といひました。

ヒサシ君は、すぐに驛長さんになつて、お縁側の前に立つてゐました。そして、汽車が近づいて來ると、胸をそらせて、ゆつくりゆつくり歩き出します。

そして、汽車が止ると、大きな聲で、

「トウキャウ、トウキャウ。どなたも、お降りを願ひます」と呼びます。けれども、誰も、一人も降りる人はありません。だつて、みんな、乗つてゐる方が、面白いからです。

4

さうすると、そこへ、また一人、お友だちが來ました。

——マサイチ君です。

マサイチ君は、

「ね、ぼくも、仲間にしてね」。といひました。さあ、困りましたね。汽車は滿員だし、驛長さんもゐるし、ほんとに困つてしまひました。たうとう、汽車も止つて、考へてゐます。そのうちに、機關車のヒデヲ君が、うまいことを思ひつきました。

ヒデヲ君は、にこにこして、

「ああ、さうだ。いいことがあるよ。君、踏切番になるといいよ」。と、マサイチ君に言ひました。

マサイチ君は、よろこんで、

「どこが、踏切なの?」と、聞きました。

「あそこだよ。ほら、木が二本ならんでゐるところさ。お玄關の方からの通り路だもの、あそこが、踏切だよ」。と、ヒデヲ君が、指さして教へました。

マサイチ君は、すぐにそこへ行つて、そばに置いてあつた、柄の長い箒をとつて、それを二本の木の枝から枝に渡して掛けました。「マサイチ君」と、ヒデヲ君が呼びました。

——「あのね。君、ハンカチ持つてゐるだろ?それを踏切の旗にしたまへ」。といひました。

すると、驛長さんのヒサシ君が、

「踏切の旗なら、白と赤と、二つなくては、をかしいよ」。と言ひ出しました。

さうすると、キミコさんが、ポケットから、うす赤い色のハンカチを出しました。そして、

「これでは、どう？」と言ひました。

「ああ、それは、いいね」。

マサイチ君は、よろこんで、そのハンカチを受取りました。短い竹に結びつけて、小さな赤と白の旗が二本出來ました。

汽車は、やつと、また動き出しました。

「シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……」。

5

マサイチ君は、踏切のところに立つてゐました。

汽車は、早く踏切のところを通つて見たいのか、お池の方をまはらずに、すぐに、こちらへ、近づいて來ます。マサイチ君は、いそいで、旗を出しました。白い方の旗を出しました。——白い旗は、「大丈夫ですよ、お通りなさい」といふ時に出す旗です。赤い旗は、「あぶないですよ、通つてはいけない、止りなさい」といふ時に出す旗です。

汽車は、いよいよ近づいて來ます。

そこへ、ヒデヲ君のお母さまが、お玄關の方から、踏切のところへ、歩いていらつしやいました。マサイチ君は、あわてました。木の枝にかけわたしてあつた幕を、はづさうとしました。もう、汽車は、すぐそばまで來てゐます。

すると、お母さまは、

「あら、そんなことしたら、あぶないわ。汽車が通つてしまつてから、お開けなさいね。をばさまは、それまで、待つてゝ上げますからね」。と、おつしゃいました。

マサイチ君は、

「ええ」。といつて、踏切を開けずに、白い旗を出して、ちゃんと立つてゐました。

ヒデヲさんたちの汽車は、踏切のところへ來ると、みんな、喜んで、わいわい大さわぎをしました。だつて、本當の踏切のやうに、ヒデヲ君のお母さまが、立つて待つていらっしゃつたからです。

シュッ、シュッ、ポッポッ、シュッ、シュッ、ポッポッ……。

汽車は、踏切を通り過ぎて、また、むかふの方へ走つて行きました。おしまひ。